

京都迎賓館に想うこと

Few Vecollections of the Kyoto State Guesthouse

三谷 康彦
Yasuhiko MITANI

VOL.70 NO. 2

October, 2006
ISSN 1340-8984

京都迎賓館に想うこと

Few Recollections of the Kyoto State Guesthouse

三谷 康彦* Yasuhiko MITANI

1. はじめに

京都には21世紀の今なお、昔と変わらぬ伝統や技能、風習や習慣などが現在進行形で生きている。そういった由緒正しい京都の地において、そのまた中心に位置する京都御苑の敷地の中に建てられる「京都迎賓館」プロジェクトに、迎賓館庭園の設計担当者として関わることが出来ることになるうとは、サンフランシスコに住んでいたつい10年前には想像だにし得なかった。

都合7年間お世話になった米国西海岸のピーター・ウォーカー事務所を辞して、日本の大手総合設計事務所である日建設計の東京オフィスにお世話になることになったのが1997年。その後9年強の年月がたつが、入社以来継続して関わってきたプロジェクトの一つが京都迎賓館プロジェクトである。私が入社する直前の1996年にコンペで日建設計が設計者として選定され、その後の計画・設計期間は1996年10月～2001年3月、工事期間は2001年11月～2005年3月という、長きに渡ったプロジェクトであった。建主は内閣府様、設計監修は国土交通大臣官房官庁営繕部様である。

2. 本工事が始まる前の前さばきの頃

日建設計に入社後間もなく、京都迎賓館プロジェクトのランドスケープ設計担当者として、まずは京都御苑内100m×200m広さの計画敷地内に生えていた低木や生垣の類から、20mをはるかに超えるムクやエノキ、黒松などの大径木を含む樹木の敷地内から敷地外への移植を1997年～2000年に渡って行なう計画の策定、発注図書の整備、工事内容の確認などが始まった。実際に工事を行ったのは植弥加藤造園さんと西武造園さんで、年度を分けて工事をしていただいた。両社ともにとってもいい仕事をしていただいたと感謝している。

また、敷地内に生えていた移植不可能な巨大なクスノキ等の敷地内有効活用計画にあたっては、日建設計を代表する優秀な建築家で京都迎賓館建築設計担当の佐藤義信氏も一緒になってその見え方や健全な保全の技術的な方法論を検討した。また庭園の基本計画を固めながら、同時に敷地

外周の一定巾部分も敷地外部分の管轄官庁である環境省様の御協力を頂きながら改修計画ならびに施工を進めていった。

敷地自体は、昭和天皇御即位の際に使用された元饗宴場跡地で、移植調査時にはソフトボール場やゲートボール場として京都市民のレクリエーションの場として使われていた。

やがて敷地外周に仮囲いの塀が立てられ、まずは埋文調査が球技場部分から始まり、同時進行で樹木移植も開始された。

2002年に建築の本体工事が実質始まる随分以前から、敷地を整えるにあたって、複数の省庁に渡っての調整作業が必要であったために現地にも足繁く通っていたが、ある雨上がりの日、建築担当の佐藤義信氏とともに現場を訪れた際のこと。埋蔵文化財の発掘調査で地中から掘り出される昔の人々の営みの証まで行き着いたその下あたりに、佐藤義信氏は良質の「壁土」として使うことが出来る「聚楽土」を発見し、また私は赤・黒・青・緑と彩りも美しい握り拳大の川砂利や礫が攪乱され山積みになった掘削土の中に混じっているのを発見した。雨で余計な泥が洗い流されて、素材の色や性状がはっきりと見て取れたのである。

もちろん二人ともこの敷地から産出した「お宝」を、後の工事で有効利用したのはいうまでもない。再利用の指示は後の実施設計で設計図書の中に盛り込んでいった。

これらの砂利は有史以前、京都盆地に北から流れ込む加茂川と高野川がまだ暴れ川だった頃、洪水時に上流から流されてきた土砂に混じっていたもののように、先行する大径木の堀上げの際にも確認している。また後の本工事になって建築地下部分掘削時に層状に礫層、砂利層、砂層、シルト層の水平のレイヤーが幾重にも重なっているのが確認できた。

この土自体は、攪乱されない限りにおいては砂利層や礫層が暗渠の役目を果たして比較的透水性は良好なのだが、一旦攪乱されると捏ねた粘土状態になり透水性能が著しく低下してしまう。この土の性状のおかげで、敷地外に曳き屋の要領で立て引き移植した25mを超える大径木のエノ

*1947年大阪生まれ、信州大学を卒業後京都にて造園の設計と施工の修業、その後渡米しピーター・ウォーカー事務所等勤務、1997年より日建設計勤務、現在、日建設計ランドスケープ設計室長

キ移植に失敗したのは残念である。

とは言え、移植工事に関しては多くの難しい樹木を9割5分以上の活着率で移植を成功させている。

3. 設計期間中に考えた話など

京都迎賓館プロジェクトは国の仕事で、言うまでも無く国民の支払う税金で建設されている。こういった公共のプロジェクトの設計は先ずはその規模の大小にかかわらず公明正大にして、中立、物事の判断に客観性を備え、全てに渡って内容の説明責任が果たせるものでなければならない。

「設計」とは「シツラエ」で「ハカラウ」と書くが、設えや計らいが先ずは肝要であると思う。これは庭園設計であろうとランドスケープ設計であろうと、また建築設計であろうと同じである。上手く「設える」ことが出来て「計らい」が出来れば設計者の仕事は半分近くが終わっていると言っても過言ではない。これは洋の東西を問わず設計者にとって必要なスタンスであることは、今までの幾多の大型プロジェクトの経験の中で学んでいる。

こう言った観点から、まずは基本計画や基本設計の期間中に、計画・設計作業を進めると同時に、庭園やランドスケープ工事に必要となる材料の材料単価の妥当性や、特殊な作庭作業内容の手間の掛け方、評価の妥当性についての検討や資料作成に腐心した。

多くの人にとっておそらく殆ど知られていない庭園の工事費や材料単価は、日本のバブル期に異常な高値にまでつり上がって取引された後、その余波を未だに残しているものから、反落して安値で取引されるものまで多種多様である。極論すれば売り手と買手の市場原理が働くのである。例えば骨董品的な価値の材料が庭園に本当に必要かどうかの判断、手間に関しては高度な技能が有効に活用されているかどうかを、いかに適切に判断するかに尽きると言えよう。

確かに公共事業に於いて一般的に使われる、歩掛かり(手間賃)や建設物価に掲載されている緑化材料単価で今回のような「日本の庭園」を具現化できるのかは疑問が残る。庭園界に限らず多くの伝統系の職人衆からも、「公共事業では満足のゆく仕事は難しい」という裏話を耳にする。それでは、実際にどれだけ工事金額が有れば本当にいい仕事が出来なのか? 国民が納得する素晴らしいものが創れるのか? その金額の根拠は何か?

それらの疑問に答えられるようにすることがこのプロジェクトの本質的な意味の一つでもあったと思う。昔のような庭芸を愛で、それに大金を注ぎ込む日本の「旦那衆」が殆んど居なくなり、それに替わって国という公共性を持つ「旦那」しか居なくなった現在、そこで説得力のある仕事を正当な金額で作り上げなければ、日本の伝統的な庭園の未来は暗いばかりか、日本のランドスケープも危なくなる

のは必定……。

そんなことを考えながらの設計への取り組みが始まった。

4. 設計期間中の材料検討の話など

庭園では、基本計画段階から幹肌の美しいアカマツの高木で通直かつ下枝の上がったもので軒の高さを越えるものを導入し、敷地外の松林や高木の緑に繋げていくことを施主に対してプレゼンし御了解を得ていた。これは、実際には意外と狭い敷地の広がり感を醸成する為のランドスケープの手法である。これらのアカマツに関しては、先行する基本設計段階に樹木の値段と掘り手間、運送賃のトータルコストを抑えた上で、群馬県にて選んで設計に織り込んでいた。同時期進行していた東京都内の他のプロジェクトにて選んだ山と同一である。東京物件で施工を担当した造園業者さんは全数冬に掘り上げて、一旦里の畑に下ろし一年間養生と万全の根作りをした上で現場搬入を行った。最終の現場植栽時期が3月であった為の処置であるが、京都では群馬から一気に運び植え付けの手法としている。ちなみに東京のアカマツは未だに一本も枯れていない。同じ山から来たアカマツだけに、それぞれの場所での風土や文化の違い、施工方法の違いなどによってその後の成長にどう影響するのか、設計者としても個人的な楽しみの一つである。

また石材、特に庭石と呼ばれる類のものに関しても、特殊な形や色目のものは極力避けたいと考えていた。元々、石に貴賤はないからである。

むしろ採石場のクラッシャーにかけられる前の原石の大きな塊の中から気に入ったものを探す。そこには生まれたてではあるが力と緊張感が感じられる。ランドスケープ造形的に考えると、石自体に意味や価値があるのではなくて、むしろ石と石の間に出来る空間にこそ意味を持たせたくなる。

京の銘石の代表に高野川上流に産する貴船石があるが、その岩層は日本海まで続いており、実際に由良の採石場で気に入った原石の数々を探しに行ったのも基本設計中のことであった。

施工者にとってはいやなタイプの設計者かもしれない。

こういった何枚かの意匠的かつ金額的なオプションとなるキーカードを何枚か持った上で、実施設計や設計監理に臨むのが、ランドスケープの常道であるとピーター・ウォーカー事務所が経験していたし、特に今回のような「庭園」の設計の場合には必要不可欠に思える。ランドスケープのこのサイズと精度のプロジェクトマネージメントをしながら、品質を確保し、かつデザイン上の想いを実現するためには必須のことと考えている。最終的な予算執行権は施主の国土交通省様にあるが、設計者としては過不足無くプロジェクトをコントロールする責任と義務があるのである。

実施設計の段階では、工事に入ってからの設計監理段階

での建築も含めての設計変更に対応する為に、京に産する銘石「貴船石」や、奈良の吉野川に産する銘石「吉野石」などを妥当な単価にて設計に織り込み仕様書に加えていた。

建築も庭園も現場に入れば好むと好まざるに関わらず、良い物にしていく為には設計変更が大なり小なり発生する。現場とはそう言うものである。この手のメガプロジェクトでは時として大幅な意匠変更も発生することもある。だからこそ実施設計図書という、発注にあたって法的な拘束力がある「契約書」の精度が重要になる。契約書の精度を上げることによって、「ハードル」の高さは厳密に設定可能となり、後に発生する設計変更に伴う増減金額のプラスマイナスが分かりやすくなる。精度の高い実施設計図書を用意するのは、設計者の自己満足のためではなく、施主・施工者双方にとって正当な工事とそれに伴う代償という誰が見てもフェアな取引をするためのツールとなるのである。前に述べた「旦那衆」の庭作り仕事ではなく、国家プロジェクトでの国民に対して説明責任が発生する場合には、その辺りに大いに心を配る必要があるということだ。

5. 伝統的技能の活用など

京都には大工、左官、建具、表具と言った建築に係わる伝統技能や、きりがね、飾り金物、有職織物などの伝統工芸が色濃く残っている。そしてまた、庭園も京都ではそのメッカとも聖地ともいえる位置を今なお保持し続けている。私自身、京都の庭師の伝統の世界で20代後半から30代前半に掛けてお世話になった経歴もあり、少なからぬ京都の庭園技術に対する想いも持っていた。

京都迎賓館は国が創る迎賓施設でそれに求められる機能とともに、国のお客様を接遇するに相応しい品位のある庭を創らなければならない。京都の庭園の伝統技能を十分に活用し、京都の庭師の皆様の能力を十二分に発揮してもらうことが不可欠だと考えた。その為には技能者たちに個別に発注する方法を考えたりした時期もあったが、発注者と共に慎重に検討を重ねた結果、中村昌生先生を委員長とする伝統的技能活用委員会というものを立ち上げた。

そして庭園も含めての伝統的技能各分野の専門家の先生方に設計図書の仕様書の確認なども行なっていたが、客観性のあるプロセスを経て、建築JVに「建築の本体工事」とは別に「伝統的技能の活用にかかわる工事」が追加発注されることになった。そして伝統的技能の一分野であるという位置づけをふまえて庭園・石工芸・竹垣工事も建築JVの元で発注されることとなったのである。

この難しいプロセス辺りから、庭園に関しての委員になっていただいた当時京都造形芸術大学副学長の尼崎博正先生には、一口で言い表せないほどたくさんのアドバイスを頂戴した。伝統的技能活用委員会で検討を十分に重ねていただいた末、庭園工事には、植藤造園、植芳造園、小林造園、

花豊造園の京都を代表する4社が選定され、佐野藤右衛門氏が棟梁役で現場での采配を振るうことになった。

また、その4社に加えて、前発注されていた敷地内樹木の移植工事でその現代の造園技法の活用と現場管理能力を評価されたのみならず、公共工事にとって必要不可欠であり且つ複雑な文書管理能力・マネージメント能力、施工図作成能力など京都4社を補完しサポートいただく意味もあって西武造園が入り、5社の庭園JV体制が固まった。

庭園工事者の体制が固まったものの、敷地内では建築の地下躯体のための掘削などで庭園工事などの表面作業が出来る状態ではない。

しばらくの間は庭園JVの皆様を、予め私が基本設計段階で目星をつけていた群馬のアカマツの山に案内する等の「音合わせ」チューニング作業が始まった。

6. 石の仮組み作業の話など

実施設計図書の中では、庭園の中で特に重要な部分に関してはその範囲を指定した上で、「仮組みを行うこと」とうたっていた。敷地面積の割には建築面積が大きく現場で庭園の検討を重ねながらといった時間が十分取れない可能性が強いこと、精度の高い庭の仕事をするには工期が十分でないこと、などにより実施設計の終盤段階で発注者様にご相談させていただき相応の予算を取っていただいていたのである。

また現場では仮組みに先立って、現場の南端をお借りして、1:10スケールの地形のスタディーの為の「模型」を作成し全員で検討を行なった。これは施主、施工者、委員会メンバー、そして設計者の庭園空間イメージの共有に大いに役立ったと思う。また、この模型の検討中に、地形の鞍部を創って、そこに枯れ滝を創る案が決まったように記憶している。

1:10の屋外地形模型の確認の後に、京都の佐野氏の山の斜面と平場部分を利用させていただいて、敷地北奥の流れ源流部分の滝組や枯れ滝、流れなどの仮組みを始める一方、四国牟礼の和泉正敏氏の石置き場で大滝の仮組みを開始した。この地形の骨格とそれを強調する石組みの仮組み作業には3つの大きなメリットがあった。仮組みを進めながら土の中に埋め込んでいる部分までの日々の精緻な測量作業を行なっていたが、そのデータを整理していただいた。結果としてのメリットの一つは前記でも述べた現場工期の実際の短縮に大いに役立ったことである。二つは意匠的な確認に十分な時間を配ることが可能となり、関係者全員のコンセンサスが1:1の原寸で得られたことである。そして三つ目は滝や流れの基礎および防水躯体コンクリートを打設するにあたっての石の根入れや出っ張り引っ込みに対応する形の施工図の作成と石の重量に対応する構造的な計算確認の精度を上げるのに大いに役立ったことである。

特に四国牟礼の和泉屋石材店の石置き場で行なった大滝仮組みにあたっては、一石47トン級の石をいくつも同時に動かしての作業なので150トンクラス的大型クレーンを2台同時に使用するなど現代技術を駆使しての作業となった。

これらの仮組みにかけた費用と労力は後に「形」として具体的に残るものではない。後に物が残らない作業に対して、施主としての国のご英断で予算を見ていただいたことはまさに画期的なことであると思う。そのご英断に報い、また庭園工事の現代でのありようの望ましい前例として残す為にも、仮組みの作業内容を充実させ、且つそれにかかった日々の作業の詳細な記録を残し、費用の実費精算体制で庭園JVに動いていただくようお願いした。

7. 現場産出砂利の再利用作戦など

一方、京都の現場では地下躯体掘削工事が進み、京都御苑という広大にして神聖なる土地の一部に、深くて広く大きな四角い穴が掘り込まれていた。この穴の土の断面壁程部分に顔を出していたのが『前さばき工事』の項でも少し述べた旧加茂川、旧高野川の洪水氾濫原として何千年もかけて堆積した礫層、砂利層、砂層、シルト層、粘土層の幾重にも重なる層状の地層であった。たぶんこの層の厚い時には大きな洪水があり、薄い時には小さな洪水があって、流域上流部からの土砂が水が京都盆地に運び、今の出町柳辺りで合流して流れも緩くなった所で堆積したのだろう。堆積するにあたっては、重いものから順番に堆積していった。そして、層状地層の上のほんの皮部分(高々2m程度)に平安京の時代から現代に至るまでの人の営為が乗っている。まさにダイナミックな水や自然と人の営為による場の痕跡、京都のこの土地のランドスケープの本質そのものを観た気がした。なるほど、この粘土層やシルト層のレイヤーの上に地下水が溜まる、その地下水はまたその上の砂層や砂利層、礫層で幾重にもフィルターがかけられたもので、その地下水のお陰でおいしい豆腐が出来るんだなどと一人で納得した。早速夜は湯豆腐のおいしい店に駆け込んだものである。

次の日に建築JVに掘削残土の搬出スケジュールと搬出先を確認したところ京都の南、城陽市の土取り場にダンプ運搬で捨てに行き今や大きな山になっているとの事である。早速設計変更の考えと事情を話して、礫分だけ再利用した場合のふるい分けの手間や、礫の土分の水洗浄の上トンバックに詰めて現場持ち帰りの手間・運賃を乗せた見積もりを出すように指示した。当然のことながら、原設計で池底の化粧に入れていた石張りの単価より随分安くなる上に、工事工程的にも池底に砂利を敷いたほうが石を張るよりも当然工期は短縮できるなどのメリットもあることが分かった。その上、敷地から産出した砂利を有効に活用できる

等の環境配慮の側面やこの土地の歴史性に配慮した観点などを文書にまとめ、発注者に提示して内諾を得た。その上で伝統的技能活用委員会に掛けてご了解いただき、本格的な敷地産出礫の再活用作戦が始まったのである。

これらの砂利や礫の再活用にあっては、京都の伝統的な技能を是非活用したいと思ったので庭園JVの佐野棟梁にこういうものを創って見たいと相談、「よっしゃ！仕事をこなすのは任しとき！」と言うわけで、延段、畳石から「あれこぼし」、州浜、池底などの素晴らしいモックアップサンプルを制作いただいた。

こうして、かなりの面積を占める池底の仕上げ設計変更により減額となった原資分を、本当の意味の技能の活用つまり職人の技や手間がかかる部分に有効に使っていただく方針を打ち出していった。それこそが元来「創造的」である京都の庭師の「伝統の技の復活」に寄与すると考えたからである。また逆に言えば、こういった原資・資金の準備・采配無しには、手間を惜しまない精緻な職人芸の発露としての庭園芸術は残しえないと確信していたからでもある。

こうして設計者の意図を佐野棟梁はじめとして京都の職人衆はよく理解してくださり、西武造園の調整のもと、素晴らしい仕事を行なっていただいた。

8. 庭の灯籠と明かり機能など

石灯籠と言え庭にはつきものだが、私は京都迎賓館ではあえて石灯籠に骨董品的な価値を見出すよりも、灯具としての本来持っていた抑制の効いた明かり機能を復活させたかった。したがってこれは実施設計図書にも特記仕様書にその旨記載していた。もちろん昔ながらの燈芯に菜種油の灯りを灯籠に燈すのは素晴らしいが、この施設の性格上「安全」が最優先される。建主様の方で賓客接遇時のありようや後の維持管理なども御検討いただき、燈芯を入れることにする灯籠を据えることも、何本か合意いただいた。それらは夕刻の火入れを半ば儀式化することが出来るような場所に限った。その他は灯籠の下台、竿、中台、火袋を貫通する細い穴を、作者の西村金造氏、大造氏に無理をお願いして穿っていただき電線を通した。逆に言えば、西村氏親子のような卓抜した技能の持ち主であるからこそそれをお願いできたので、そうでなければ考えなかったろう。燈芯の持つ揺らぎや明滅の無い明かりではあるが、実際の照明器具としての機能も持たせて必要最小限に抑えた数で夕刻から夜の景を整えた。

京都御苑の敷地は、都心であるにもかかわらず結構暗い。暗いがゆえに高木の連なりがその向こうに気配を感じる街の明かりの前でスカイラインのシルエットを形成して美しい。日本の美意識でもある陰影礼賛の世界を京都迎賓館では大切にし、月をめ、星を楽しむことが出来る、これが京都御苑の中の京都迎賓館ならではのおもてなしとした。

9. 施工中の話など

「旦那衆の仕事」ではなく、税金を使っての国家プロジェクトで説明責任のある状況下では、「設計変更」が行われるたびに、面倒ではあるが原設計と変更設計の工事金額の「仮精算」を行なうことになる。それらの変更を一年毎にまとめた「年間の精算行為」の必要性が出てくる。また変更設計図は原設計図の「精度」を以って記載するのが通例の設計図で、それ以上でもそれ以下でも可とはされない。それに先立って変更設計の元になる設計者発行の変更指示書やスケッチ等を元に、施工者は現場での自分たちの施工が可能で、変更数量の拾い出しが可能な施工図を作成し設計者の承認を得る必要がある。現代のランドスケープや建築のプロジェクトではこういった書類のやり取りが必要となる。誰でも出来れば避けて通りたいのは当たり前、そのみんなが嫌がる地道な作業部分をカバーしていただいたのが西武造園さんであった。京都の伝統系の方々の裏方として、現代造園技術を見えない部分で遺憾なく発揮したことは大いに評価されるべきだと思う。

一般的に言えることではあるが、庭園的な精度のプロジェクトになると、設計図の作成も難しいが、全てを施工図として作成するのはもっと難しい。至極の技と言わざるを得ない。コンクリートや切石と言った硬いものならまだしも、柔らかいものや地形、石組みのちょっとしたニュアンスと言ったデリケートなものの表現は現場でしか出来ない場合が多い。また、設計者の想いと施工者の想いが同じ方向を向いている場合もあれば、当然違う場合もある。例えば、州浜南端の池に張り出した大きな平石の船着場のあたりの空間構成ように設計案通りに進めなければ2本の塩田に使われていた堰門石の間が池のオーバーフローとして機能しなくなるので設計図通りに施工していただいた場合もあれば、施工者の気持ちと施工のリズムを汲んで施工技能者の裁量に任せた部分もあった。設計者としてはこの施工者の考えを何らかの手段で（例えばスケッチや図面など）理解する責任と義務があり、それが出てこないで工事が勝手に進められると施工図の提出を強く迫ったこともあった。

まずは庭園の品質を高く保つこと、そして総合設計事務所の日建設計としての「庭屋一如（建築と庭園が一体とな

る)のコンセプト」を具現化すること、同時にそれらがトータルの工事予算で収まるようにすること。そのためには中立の立場で、品質を管理しながら、設計監理する。それがプロジェクト現場期間中の設計者として求められるスタンスであった。京都の庭園関係の皆様には御理解いただけなかった部分を含め、立場とリーグが違うので、誠に残念だが致し方ないことと思う。

10. おわりに

何はともあれ、京都迎賓館は疑いもなく日本の国を代表する、品位と品格ある建築と庭園が一体となったものとなった。

そして幸せにも庭園施工を担当いただいた庭棟梁佐野籐右衛門氏との連名にて日本造園学会学会賞作品部門に応募することができ、幸運にも栄誉ある造園学会賞を頂戴することとなった。

このまたとない素晴らしいプロジェクトを遂行するにあたって庭園そしてランドスケープに、深い御理解を賜り、大変お世話になった、内閣府様、国土交通大臣官房官庁営繕部様、国土交通省京都営繕事務所様に、深く感謝の意を表したく思う。

工事期間中にお世話になった、大林・鹿島・竹中の建築JVの方々、京都の庭師のベテランから若手職人さんまで全での方々、西武造園の柏木氏、池田氏、庭園JV所長加藤氏など多数の方々、石工芸の西村金造・大造両氏、竹垣ですばらしい技能を見せてくださった中川・横山両氏、伝統的技術には入らないものの紛れも無く日本を代表する石のアトリエ代表和泉正敏氏とその職人さん達、特に工事にあたっては庭棟梁としての重責を立派に果たされた佐野籐右衛門氏と副棟梁の井上剛宏氏には、深い感謝と尊敬の念を捧げたい。

最後に、単に伝統的技術活用委員会の委員としてのアドバイス領域をはるかに超えて、日建設計としても三谷個人としても継続してモラルサポート等を頂いた尼崎博正先生には特別な謝意をこの場をお借りして捧げたい。

最後に、このプロジェクトに係わることが出来た運命に対して、深く神に感謝を捧げたい。